

手塚岸衛の実践と挫折

— 大正自由教育の一齣 —

本間 道雄

Kishie Tezuka's Trial and Error.

— A Case of Liberal Education in Taisho Period. —

by Michio Honma.

一 大正期の新教育

大正期は先行する強力な国家主義的時代と後続の軍国主義時代に挿まれた短い自由主義的な一時期である。思想・芸術・社会の全分野で一せいに新傾向は競い合った。新カント派とプラグマチズムとマルキシズム、文芸では自然主義と白樺派、政治社会では普選運動と労働問題等々とはなやかであった。

しかしこれらは十年を出ず殆ど色あせてしまう。「大正デモクラシー文化の仇花」と称する者もいるが果してそうであろうか。教育に於てもこの時代ほど新しい理論と実践が生れた時代は少ない。動的教育・創造教育・自動教育・自由教育等々。これらはわずかの例外を除いて——（その例外すら甚しい変質を強いられて残り得たにすぎない）消滅してしまった。しかしこれらは決して大正期に至って突然表われ、忽然として消失したものではない。すでに先行する明治三十年代にその萌芽は生じ、その末は昭和の十五年間の戦時にも伏流となって細々と生き続けていたのである。そして今日の教育の中にも生きている。

これらの教育の諸実践の指導者の中で、その出現に於てまことに華々しく、その撤退に於て極めて悲劇的な手塚岸衛の実践とその挫折を見てみたい。

教育方法の革新ということについてはすでに一九世紀末から一部に試みられていた。（教育理念は国家主義的或は侵略主義的でさえあったとしても。この理念と方法の乖離はのちの手塚の場合も小原国芳の場合さえも同様であった）古く一八九六年（明治二九年）東京高等師範学校訓導樋口勘次郎が行った有名な「飛鳥山の遠足」の実践。活動主義・統合主義の実践は画期的なものであった。これは東京高等師範学校訓導棚橋源太郎(1)の直観教授、郷土科——を経て大正時代に至るのである。

しかし大正期に入ると新しい教育の理論と実践はその量、質ともに急に向上し多彩となった。これらの基本的な性格は今日のような民主主義的な教育理念に基くものではなく明治教育のブルジョワ的修正だと見られる。(2)

これは新しい教育を要求する社会的な基盤階層の成長によるものである。明治十年代から大正初期まで日本経済は日露戦後の不況と資本主義成長の停滞に喘いでいたが、一九一四年第一次世界大戦の勃発によって思い設けぬ経済的繁栄を手に入れることができ、自由主義的な都市型中産階級の成立を見るに至った。（別表参照）

この戦争中に設けられていた臨時教育会議は社会の必要に応じるため一九一八年（大正七年）一月の第一回の答申で「国家の中堅たるべき中流階級に対する教育としては国運の進歩に堪がみ、さら

に精深なる高等普通教育を必要とするに至って」いるとのべている。

(3) その結果、高等学校一〇校、実業専門学校一七校、大学学部四部、医科大学四校等を新設することとなった。しかしながら義務教育段階の改善は殆ど見られなかった。(むしろ小学校教員の定員減、経費節約等悪化した)義務教育に於る新しい教育の理論と実践は(一)前述の樋口(勘)・棚橋を発展せしめて奈良女子高等師範学校付属小学校木下竹次の合科教授や手塚の千葉師範学校付属小学校の自由教育のような選ばれた教員と選ばれた児童の、その行政から或る程度自由な、いわば特権的な学校で行われた。また(二)私立学校Ⅱ所謂「新学校」、例えば西山哲次の帝国小学校、中村春二の成蹊小学校、沢柳政太郎の成城小学校、羽仁もと子 自由学園、野口援太郎の池袋児童の村小学校、芦屋児童の村小学校等のブルジョワ的な小型私立小学校で行われたにすぎなかった。長野県等の一部で実践された、「白樺派教育」と言われる人道主義的個人主義的な教育が行われたのは、公立小学校としてはめずらしい例である。

これらの新教育に対して当初は文部省も府県当局も一定の範囲である程度までは協力的であった。少くとも黙認の態度を取っていた。手塚が京都府地方視学兼女子師範学校教諭であったとき(一九一七—一九一九年)京都府の教育基本方針は自学自習主義に傾こうとしていた。(4)

一九二一年(大正一〇年)に至って漸く千葉県内に自由教育の波が高まってきて県下の郡長の殆ど全員が自由教育反対の決議をしたとき、折原知事は小学校長会議の席上で伝達される指示事項のなかで「近時教育上ノ新思潮トシテ自由教育、動的教育、児童中心主義教育等盛ニ唱導セラレ従来の欠陥タル児童ノ個性ヲ軽ンゼル注入的画一的教育法ガ漸次改善セラレルコト頗ル喜バシキ傾向」とし評価した。

しかし一方で「個人主義ニ墮シ放任主義ニ陥リ易キ弊害」を指摘

している。即ち害にならない範囲で、あまり目立たないようにいうことであろうか。「之が採否ハ学校ニ一任シ」たのである。(5)しかし県によってはすでに新教育のごく初期から強い抑制、弾圧を行っているところもあった。

二 旧教育批判と自由教育

一九一九年(大正八年)、それまで二年近く京都府視学兼京都女子師範学校教諭であった手塚岸衛は千葉師範付属小学校主事として転任して来た。時に三十九才。理想とエネルギーに溢れていた。手塚は既に京都府女子師範学校校長は「自律的学習論」「合科学習」の主唱者木下竹次であった。

また京都では前任校福井師範学校時代の同僚篠原助市と一つ棟の下に住んでいた。このことは後の千葉に於る自由教育に篠原が大きく関る契機となるのである。

しかも千葉師範付属小学校では前年「自由研究」「立憲的活動」が学校経営の基本的方針として定められていたし、県も児童の自発学習をすすめる方法について諮問していたところであった。

彼は自由教育について情熱と使命感を持って着任した。学校では石井・水鳥川・吉田等十七人の気鋭の訓導が期待して彼を迎えた。

彼は従来の学校教育は「一斉画一主義」と「束縛干涉」によって児童の伸びる力を殺ぐものである。「形式主義」は児童の自主性を喪失せしめる。「実利主義」「結果主義」は不確実なる未来のために、児童の現在を犠牲にするものであるとして鋭くこれを批判している。(6)「今日ではよい教師といわれるものほど親切すぎて世話を焼きすぎて、知らず識らず児童の自主性を損じて悪意ではない善意の干涉圧迫に陥っている」と。「往年全国に流行した、地方によっては今なお盛に残存している各小学校成績比較試験というものが

ある。……その点数によって学校の甲乙が決められた。時とすると一校内に於てもこうした方法が行われる。甚しいものになると試験当日は劣等児を欠席させて平均点を上げようとさえする……その校一番の平均点を獲た担任訓導が校長から慰労出張を命ぜられたとか、村から十円の賞与を受けたとかいような滑稽すら演ぜられたことも耳にしたことがある」(7)と手塚は書いています。

また実用主義打破について「教育即生活」の立場から言っている。「実用主義は社会的利用が最後の標準であって利用の外に教育の動機がないことになり、直接利用を重視するところから必要に基く以外学習意志は起こさぬこととなりはては森嚴なる精神生活を没却し、高遠なる理想主義を沈黙ならしめることとなるであろう」と。(8)また「教育は生活の準備でなくて生活そのものである。……大人は現実の世界に住む。児童は理想の世界に住む。活動に渴望と嘆美と信仰と、おうよそれらは児童生活の特質である。児童をして児童にふさわしき生活を生活せしめよ」と言う。(9)

大正十年八月一日から八日間にあつた新教育に關し連続講演会が催された。及川平治、河野清丸、樋口長市、片上 伸、千葉命吉、稲毛金七、小原国芳と手塚であつた。

会場は東京高等師範学校講堂であつた。約二千の収容定員に対し申込みは五千五百余名、当日集つた者は四千名を超えたと小原国芳は言っている。「大講堂ミッシリ。廊下もびしり。窓も鈴なり。熱狂そのものだった。ホントに湧き立った」(10)『八大教育主張』と言われるものがこれである。この席で自由教育の前提としての自学主義について次のようにのべている。

「学校の全時間を挙げて子供の自学ということに徹底せしむるの必要があるのではないか。教授時間は教授時間として我々が教授をなし、子供には子供の自学として、早出晩退や家庭に帰ってなさしめるというように二つに分けることは如何であらうか。予習復習と

いうようなことが自学自習ではあるまい。学校で教師がついて居てやるのが本習ではなくて、実は今迄我々が考えていたような予習復習というようなことが是が本習なのである」(11)と。

三 千葉師範付属小学校に於る実践

自由教育の実践の客観的主体的条件はまさに熟していた。この時から三年ほどの間が各方面から自由教育が支援され、或は支援とまではいなくとも少くとも激しい反対にあわなかった束の間の期間であつた。「自由教育」は手塚を中心に付属小学校の教員が結成した教育団体、「白楊会」の会員の命名であると言う。自由教育は大正時代の政体論であるところの「民本主義」概念と教育を結びつけ発展させようとしたことに始まる。千葉県教育会は白楊会の動きに同調せず、のちには弾圧の側に廻るがこの時までにはむしろ新教育推進の立場に立つたのである。(12)

このような条件の中で手塚は着任早々その持前の行動力を發揮した。彼は早速、自分の教育理想を実現するため、同校の教員を前述の白楊会に組織した。これが「千葉の自由教育」の推進母体である。のちにこの白楊会員が県下は勿論のこと、日本各地に研究会の講師に招かれ、全国規模の研究会を開く。さらに機関誌「自由教育」を発行し、白楊会員その他の著作物の出版をするのである。

手塚の自由教育は教科に關しては「自学自習」となつて表れた。教科指導は「分別扱」と「共通扱」という二種の形態をもつた。

「分別扱」は更に「異教科異教材異程度」の分別と「同教科異教材異程度」の分別に分けられる。前者は教科、程度、学習の場所等完全に自由なものである。毎日の十一時から十二時までが「自由学習の時間」で前者がこの時間に実施されることが多かった。後者は通常は教室で教師の指導下に行なわれるが、時間の大部分は自学自習であり、それぞれの能力に応じ進度が異なる。一二年上級の教材に取

り組んでいる者もいれば、該当学年の教科書を学んでいる者もいる。それぞれ疑問、相談があれば教師に尋ねる。教師はこれに応ずる他、比較的遅れているグループ指導を懇切に行うことができる。また各時間のうちの一部を以て通常の学校で行うような一斉の教授Ⅱ手塚の所謂「共通扱」を行うのである。

手塚は、人間の才能に相違があることは当然であってそれをクラスの中程度のところにねらいをつけて、ひとしなみの授業を行うことは人格の尊重を損うものと考えていた。だから当時の付属小学校の机の配列は能力ごとに数名ずつがブロックをつくり自学自習と指導の便なるようにしていた。

手塚は児童の自習に資するため「自習室」を設け、児童用黒板、参考図書、標本、児童用辞書などを多数備えた。児童は自分の力に応じて深く或は着実に学習する。自己の目標とするところに達したと思えば、その範囲で教師に試験を課してもらうよう自ら求めるのである。その結果児童は自己の理解の度を確認し、教師は児童の指導の資とするのである。

このように進度がそれぞれ異っているのであるから画一的な試験により成績評定をし通知簿を作成することは余り意味がなくなる。手塚は通知簿を全廃した。そのかわり年一、二回父兄の来校を求め「児童の学力・操行・体力につき懇談す。父兄は通知簿による通信よりも寧ろ之を喜べり」⁽¹³⁾といている。

学級は四〇人を原則とし教科担任を加味し「持上り主義」とした。学級の経営は学級の独立を完全に認め、責任は担任訓導にあり他の干渉を許さなかった。「吾等に『学級王国』の標語あり」と称して。自由講座を設けた。自由時、放課後を利用し、英語・ローマ字・生花・茶の湯・作詩・作曲等の講座を開き自由に児童に聴講させた。

これはのちに手塚が大多喜中学校長になったときも舞踊団や女流歌手の招聘をし、更にのち自由ヶ丘学園を創設したときも舞踊家石

井漠を講師としていくことに連ることである。手塚らしい教養主義の表れであろう。尤も大多喜中学校の場合はこれが手塚追放のストライキの口実の一つにもなったものようであるが。

手塚の実践のもう一つの柱は児童の自治活動であった。手塚はかねてから学級自治会の組織を考えていたが、千葉に着任すると早速これに着手した。初年度は尋常五年以上の学級に対し次年度から尋常一年から高等科二年までの全学級に組織せしめた。

これには手塚はかなり周到な準備をしている。「先づ尋五以上の学級に対し主事も担任訓導も知らず知らずの間に自治の必要を児童に感ぜしめて自然に同会の設立されるのを待てり」⁽¹⁴⁾と言う。この間、数ヶ月を要した。「自由教育の闘士」と呼ばれ敏速な行動力を有する手塚としても着任最初のことでもあり誠に慎重であった。

自治会の役員は各級毎に会長一、副会長一、幹事若干、顧問は学級担任訓導であった。任期は一学期間とし毎週一回例会を開いた。活動の内容は「学校生活に関する自治的修養の全般を包括し、教師予め之を限定することなし」としている。がその活動の主なものを見ると写生遠足会、自治集会、学芸発表会、(学級単位と全校の二種あり)展覧会(図画、手工、書方、綴方、研究物、製作物等)理科祭(これは理科の実験で殺した生物の慰霊のため五年生が行ったのに始る)綴方批評会、相互忠告(各児童、或は学級間の忠告、反省、時には友人間の善行を彰することもある)建議(学校生活に関して改善すべき点を決議して主事に建議する)お伽会、雛祭、学校奉仕、鍊胆会等である。その多彩のことは今日でも驚くほどである。すでに一九一〇年頃谷本 富は彼の学位論文の「中等教育の革新」の中で中学生の自治につき書いているがその中で、学校議会の開設を通して生徒の自治能力の開発を期している。⁽¹⁵⁾

また一九一一年に創立された西山哲次の帝国小学校Ⅱ所謂「新学校」の嚆矢、はその校憲の第十条に「立憲的自治国民の修得法とし

て尋常二年以上の児童中より級長、副級長若干を選挙せしめ」と児童の自治を尊重すべきものとしている。大正デモクラシーの時代に入っては一層この傾向は広まったが、やはり手塚の実践は極めて高度のものと言うことができる。

のちに白楊会の発行する機関誌「自由教育」第一号、一九二四年三月発行、にこの自治集会の記録が掲げられている。⁽¹⁶⁾ 学級は高一高二の合併学級である。顧問は川島訓導。十二月の第三日曜日の学級の活動は何を行なうかと言う前回からの懸案について審議した。記録を見ると数多くの児童が明確にその主張をのべているし、いい加減のところで妥協することなくよく審議をつくしている。議長は高一の副会長が代理でやっていたので不馴れだったと顧問は書いているが、半世紀以上も前のこのことを思えば会議の運び方、表現力、自治意識は相当に高いものと言つてよいであろう。手塚の着任から四年余のことである。彼の目標は着々と実現していた。しかしこの時の会議は時間切れで翌日、臨時自治会を開いている。この記録の末尾に担任訓導の川島はこう付言している。

「零時半閉会となったが責任あり而も自発的の後片付の協同動作、いちいち私の心は鞭打たれて魂の偉大なおののきを覚えた。あゝ自律自治、自由責任。何と力のこもる言葉でしょう」

この手塚の実践は児童にはどう受け留められたであろうか。手塚の「自由教育」で六年間の小学校生活を送った人々のクラス会で、たまたまこの手塚新教育の評価が話題に上ったことがあった。殆ど全員が今にして思えばあれはなかなか面白いものであった。マイナスの面は特に見当らない、と言う結論になったと言うことであった。⁽¹⁷⁾

四 対外的活動

手塚は着任と同時に白楊会を自校の教員を中心に組織した。機関

紙「白楊」を発行し各地に白楊会の支部を結成した。また一九二〇年九月、全国師範学校主事会議で「千葉の自由教育」を発表したところ、これが東京日々新聞（現「毎日新聞」）に大きく取り上げられ引つづいて大阪毎日にも書かれるに至り、関西一帯に自由教育論議を巻き起こした。「これが自由教育なる術語が社会的に教育界に誕生したはじめである」と手塚は書いている。⁽¹⁸⁾ まさに衝天の意気が感じられる。

手塚は同年十月求められて「自由教育の実験」を大阪毎日紙上に三日にわたって連載した。白楊会は京都時代から手塚と泥鰌の東京高等師範学校にいた篠原助市教授を招いて「哲学と教育」の講習会を開いている。翌一九二一年（大正十年）八月一日から八日間、新教育の代表的理論家・実践者を集めて所謂「八大教育主張」の講演会があった。及川平治、小原国芳等と共に演壇に立った手塚の熱弁は聴集を魅了したと言う。手塚岸衛と千葉の自由教育の名声は一挙に上った。これから一九二四年ごろまで全国から千葉師範学校付属小学校への参観者は年間四、五千の名に及んだ。当時こゝに学んだ児童たちはいつでも参観者が教室内にいるものだと思つていて、特に気にもならなかった、と言っている。⁽¹⁹⁾

付属小学校の訓導は県下各地の自由教育講習会に講師として出張した。一九二五年は一一校、三一〇回に及んだ。その他県外各地に出張し、その足跡は植民地にも及んだ。その上毎年三日間程度千葉で「自由教育研究大会」を開催した。一九二四年六月十四日から大会の模様が機関紙「自由教育」第二号にのっている。付属小学校へ急ぐ参加者の長蛇の列が写されている。この大会の参加者は一、四〇〇名であった。北海道から熊本に及んでいる。地元千葉の他秋田五五名、群馬七一名、愛知三五名は多い。講師は当時東北帝大教授の篠原助市、手塚岸衛他であった。研究及び発表は付属小学校の全学級で全訓導が行った。第一時は全学級とも「分別扱」第二時は

「共通扱」であった。

地方支部の活動も活潑であった。秋田支部では郡教育会長の後援で自由教育講習会が四日間にわたって開催された。のち生活綴方運動に生涯をかけるようになる成田忠久等も一九二一、二年には自由教育の影響を受けたものと思われる。秋田の運動の中心人物は能代尋常高等小学校訓導飯坂兵治であった。大正十一年十二月には手塚等を招いて「自由教育の原理と実際」の講演会を催したところ雪の中を六〇〇人の参会者が集った。²⁰⁾

しかしこれらの会員のうちの少からぬ人々は自分たちの児童の置かれていた苛酷な現実を前にして次第に、都会のしかも師範学校付属という恵れた条件の下に生れた運動から離れていった。彼等の行く先は北方教育であり生活綴方運動であった。

手塚は一九二四年（大正十三年）三月彼等の機関紙「自由教育」を持つことになる。

第一号には手塚をはじめ付属小学校の数人の訓導が書いている。他に文学博士小西重直が「自由教育の誕生」を、慶大教授小林澄兄が「自己統一の教育」を書いている。原田実（早大学院）文学博士金子馬治の名も見える。

当時一流の学者の寄稿のある紙数一六〇頁の機関誌は一小学校を中心とした会のものとして驚くべきものである。

手塚の兄事する篠原助市の名がないが、扉には篠原の京大時代の恩師であり多大の影響をうけた朝永三十郎の著「近世に於る我の自覚史」の中からの抜粋を掲げている。

また目次の次に口絵としてカントとフイヒテの写真を載せている。篠原の影響の強いことをうかがうことができる。手塚の自由教育はカント哲学をその基盤としていられると言われるが——そして彼の言説の端々にそれが見えるが彼の実践と理論との適合性については異論も少くない。

第一ページに「自由教育の誕生」と言う宣言を掲げている。

「自由教育」は生れた、日本の教育学風土一般に哲学的考察を深めようとして。

「自由教育」は生れた、自由の真義を闡明し理想的教育を樹てようとして。

「自由教育」は生れた、自由教育の基礎原理と実際的方法を究めようとして。²¹⁾

雑誌「自由教育」は平均一五〇ページ、年三回発行、年一円の会費の納入者に送られた。第二号は大正一三年九月一日に発行。この号には篠原助市の「教育の対象としての相互関係」が載っている。他に東北大綿貫哲雄、理学博士石原純等が名を連ねている。豪華な顔ぶれと言えよう。

第三号は同年十二月発行で扉に田辺元の「カントの目的論」からの抜粋がある。この号には評論家土田杏村、東京高等師範学校教授樋口長市、早大教授中島半次郎と並んで「私の経営する中等学校の自由教育」の一文を長戸路政司が書いている。

「自由教育」の購読会員数はこの種の雑誌としては、極めて多く第二号では三千三百六十六人（千葉千三百十人、秋田三百三人、徳島二百十人、他に百人以上の県は群馬栃木神奈川愛知である。範囲は北海道台湾から満洲に及んでいる。²²⁾ 第三号は四千人を超えた。県内の小学校教員に対する「自由教育」の購読者数は第一号では、二〇・三%、第二号では二八・一%である。その普及度は驚くべきものである。

しかし、この「自由教育」も一九二五年十二月号（第六号）で発行所宝文館とのトラブル等から白楊会の直接発行として出直す旨が書かれている。翌大正十五年一月から月刊「自由教育研究」として再出発した。しかしこの事は自由教育それ自身の運命を予言したものであろう。治安維持法は制定され岡田良平の文部行政は自由

教育に厳しい対応を示した。

五 自由教育批判

一九二〇年から二四年ごろまで文字通り一世を風靡した「千葉の自由教育」に対して反撓や批判は一部で早くから起っていた。

初期に於ては感情的な反撓が多くこれには手塚も「未だ覚醒せざる者は速かに眼を日本否、世界の教育大勢に注ぎ新時代に順応し得る資格の根柢たる修養を急げ」と大声して一蹴している。

しかし理論的な批判が出はじめた。

千葉女子師範学校校長竜山義亮は「自由を憧憬するのあまり極端に自由の価値を認め、自治を主張するのあまり放縦を未然に防ぎ得ない、としている。更に批判は次第に理論的な深まりを持つに至った。それは「自由教育」の理論と実践のズレをめぐって惹き起こされた。西 晋一郎、吉田熊次、大瀬甚太郎等の批判がそれである。ここに至って「自由教育」は理論的武装の必要に迫られた。手塚はこの理論的な支柱を小西重直、篠原助市、長田 新に求めた。特に篠原には十年來兄事し、京都在住時代には二年近く一つ棟の下に住んだのである。当時からドイツ理想主義哲学を研究していた篠原の影響は少なからずあったに違いない。

しかし彼の実践Ⅱ方法と哲学Ⅱ教育理論との適合性は果たしてどうであったか。千葉師範付属小学校の実践ではどれほど理論が重視されたか。「自由教育」誌に掲げられた理想主義哲学と彼の実践との間にツケ焼刃的なものが見えた。少くともその初期に於てはそうであった。彼は多くの理論的批判を受けるに至って理論的再武装を考えたのである。

篠原や小西は研究会の講師としてしばしば招かれた。特に篠原による哲学研究会も開催した。

東京高等師範学校の大瀬甚太郎の「(自由教育は)理想主義をそ

の根柢としようとするのは一層滑稽である。これは頽廢的気分の自然主義の結果を弁護し、又はそれに威厳をつけたいためなされたことと思う」と言う批判に対し手塚麾下の俊秀石井信二は「我が国の自由教育が凡て自然主義としてのものであるとされる大前提に於て吾人は不満を感じざるを得ない」と「自由教育」紙上で勇敢に反論している。²⁴⁾

しかしこの頃(大正十三年)から内外客観情勢はかなり変化してきた。内部からの批判もあった。「自由教育」賛助員として暖かく白楊会を支援してきた法政大学の城戸幡太郎の批判が現れた。外側からは行政の圧力が少しずつしかしやむことなく強まっていた。

こうした中で自由教育の理論的支柱である篠原は、社会情勢の変化と次第に重きをなす自己の社会的な地位の関係から「千葉の自由教育」との関係を断とうと考え始めていた。そしてついに「手塚氏の自由教育は自分がうしろから糸を引いているという世評はあやまりだ、僕の意見を実際化したのが手塚君の教育だと言うわけではない」²⁵⁾と言うまでに至った。

一方、教育の現場からの批判も起った。

その一は城戸が批判的理想主義教育学が先験的超越的なものとしている目標の「文化」「理性」は、じつは「歴史的なもの」でありそういう観点からつかみ直されなければならないという意味のことを言った。このような批判は県下の公立小学校の現場からは、学習が上滑りだ、一つの新しい「型」が生じた、或は地域の実情無視、と言った形をとって表れてきた。

馬を借りたかわりに一日子守りにいくため学校を休む児童、教科書以外に一冊の本も家になく雑誌という言葉さえ知らない子たちの漁村の小学校の平野婦美子は「自由教育のさかんに唱へられたころであったが、そういう研究会では学校を休む子供が多くて困るといような問題はとり上げられず、多くは一時間の教授の形式などが

はなばなしく問題にされてゐた」²⁶と。

こうした批判は形こそ違え県内にかなり出て来ていた。

手塚の華々しい実践は水準のそろった児童と比較的恵れ家庭環境と優秀な職員組織と一定の範囲内で自主性を認められた付属小学校という条件の下でこそ特に成果を見たものと言えよう。

当時の教育を受けたひとりとは「試験で振るつた子ばかりで家もよかったので、ああいうことができたとも言えましょう」と言っている。²⁷ 批判はさらに新教育の中からも起った。啓明社の下中弥三郎は「所謂新しい教育思潮の中には『贅沢学校』と言うようなものがあり、その精神に於て『貴族的』でありその目的はよき労働者を作ろうとするものではない」と。²⁸

同じような立場から池袋児童の村小学校の野村芳丘衛は戯曲の型を藉りて痛烈に批判している。

「父旧教育」が瀕死の床にあるところへ奈良から特効薬を持て来るが効果がない。(奈良女子高等師範学校付属小学校木下竹次の合科教授を諷意している)。次に千葉から「理性的自由」という霊薬を持ってくる。しかしそれはすでに昔から日本にあった支那輸入の朱子会社製造のものをカント会社が作り直したものだという筋である。手塚批判である。²⁹

下中や野村が批判したようないき方は一は、児童の村小学校のよくな個性的な、しかし或る意味ではアナーキスティックな感さである特異な小学校となり、その後しばらくの間存在しやがて消えて行った。他の一は「新興教育」の中に発展し戦時に至って弾圧の下に消滅せしめられた。

六 圧迫と挫折

自由教育に対する県当局の圧迫は千葉ではさ程露骨ではなかった。しかし茨城では異常な激しさで自由教育の弾圧を行ってきた。早く

も一九二一年に結城郡で開こうとした研究会は圧力によって禁止された。さらに翌年水戸市教育会が開催した自由教育講習会は当局の妨害のため聴講は僅か三名、講師の手塚は身の危険を感じつつ演壇に立った。

このことは雑誌「自由教育」の購読者が茨城県下では異常に少なく、多いときも二十七名でついには皆無になったことにも表われている。

千葉では直接の圧迫はなかったが大正十年ごろに比べると、大正十四年の自由教育に対する当局の方針が、次第に変化してきている事は明らかである。例えば十年の知事の校長会に対する指示事項は「近時教育上ノ新思潮トシテ自由教育動的教育：等盛ニ唱道セラレ從來ノ欠陥タル児童ノ個性ヲ輕視セル注入的教育法が漸次改善」される傾向を喜ばしいものとしていたが、十四年には指示事項で「尚未ダ新教育ノ精神ヲ極メズシテ教育ノ正鵠ヲ失セルガ如キモノアル如シ、斯クノ如キハ從來ノ所謂一斉画一的授業法ト共ニ速カニ之レヲ打開シテ正道ニ就カシメ」ることを望んでいる。

一九二四年(大正十三年)岡田良平が文部大臣となるや新教育への攻勢は次第に強くなった。特に文部省の直接の力が働く高等師範や師範学校の付属小学校では従来多少とも自主性を許していただけに干渉は強かった。奈良女子高等師範付属小学校主事木下竹次も文部省からの強い注意や干渉に「思想は自由である、と、思わず口に出る。それが問題になることがあるから注意せねばならぬ、屈してもまた伸びる時があるから細心の注意を以て臨まねばならぬ」と言っ

て次第に後退せざるを得なくなった。手塚は大多喜中学校長への栄転という形で自由教育の殿堂から弾き出された。大正十五年である。これについて手塚は「自由教育研究」(「自由教育」の後継誌)の第四号で「中学校長になったわけ」と題する一文を載せている。「(転任することは)本店(付属小学

校のこと）は益々鞏固にあって私は支店長としての戦線を拡大したものと喜び下さらん事を願ふのであります」と言いながら文末では「諸君、記憶して下さい。時は大正十五年の春、我が県当局は誰々であるかを」と怨みを込めて書いています。

この年は自由教育にとって大きな転機の年であった。機関誌巻末の編集便りに佐久間治八は「手塚主事を内部より失ひたることは何となく心寂しさを感じないではないが、同人一統歩武高く自由教育の正道を濶歩する」¹⁰⁾と言っているが、何となく心寂しい程度ではなかった筈である。

この年、自由教育にもう一つ大きな打撃が加えられた。手塚は自由教育の陰の支柱とも言うべき妻文子を失った。文子は白楊会の代表者ともなっていた。

大多喜中学校で手塚は敢然と自由教育を実践しようとしたが、保守的な城下町の中学校、上級学校それも陸軍士官学校や海軍兵学校への進学者の多いことを誇るこの中学校でのドラスティックな実践はたちまち摩擦を生じた。

配属将校との衝突、それに引づく憲兵隊や警察官も関わるような大ストライキという結果となった。

一九二七年（昭和二年）六月、手塚は職を辞した。在職わずかに一年二ヶ月であった。

白楊会の活動も急速に不振に陥った。明らかに「転向」する者も出た。各種の研究会の出席者も減少して来た。「自由教育研究」の購読会員は下向の一途を辿った。前身の機関誌「自由教育」当時は三千〜四千あった会員は昭和二年の第六号では激減した。月刊の後継誌「自由教育研究」も毎号購読会員の勧誘を依頼し、入金がないと継続が不可能になると訴えている。経営の困難のほどが思われる。誌面も次第に生彩を欠くようになり紙数の殆どをアンケートで埋めた第六号（大正十五年七月十五日）を以て廃刊となった。

この一年後に手塚は千葉を去っている。

手塚の自由教育は一、与えられた「自由」の範囲で急速に且、極めて広範に拡張しようとしたこと。二、その実践と理論の緊密な関連の欠如。三、迫り来る社会の、思想の変化の流れに棹さすことができなかった。四、師範学校付属という特殊な特権的な学校と通常の公立小学校との著しい差違。五、私立小学校のように少数中産階級の子弟のみにたよることができないこと、以上のような諸因の他に手塚自身の闘争的な性格、直情径行的な気質も原因したかもしれない。

しかし束の間の短い間に花咲き凋んだ自由教育の影響と評価は別にまた考えねばならぬ。

手塚はこの後、自己の理想を何としても達せんとして東京府下荏原郡に自由ヶ丘小学校を開いたが経営の困難からついこれを放棄せざるを得なかった。同校はのち巴学園に引き継がれた。

手塚は一九三六年に没した。

〔註〕 1. 中野光「大正自由教育の研究」五四頁以下

2. 池田進 本山幸彦編「大正の教育」四四頁

3. 文部省「学制百年史」四八二頁

4. 池田・本山編 前掲書 二五八頁

5. 千葉県教育百年史 第二巻 二八頁

6. 手塚岸衛「自由教育真義」一三頁

7. 同書 四四頁

8. 同書 五八頁

9. 同書 一二二頁

10. 小原国芳他「八大教育主張」復刻版 四頁

11. 同書 一一頁

12. 中内敏夫「近代日本教育思想史」 三一一頁

(別表)

第1次大戦前・戦中の輸出入(単位千円)

	輸 出	輸 入	差 額
1902	258,303	271,731	-13,428
03	285,502	317,136	-27,633
04	319,261	371,301	-52,100
05	321,534	488,538	167,004
15	733,057	563,391	169,666
16	1,173,975	794,533	379,442
17	1,663,454	1,088,307	575,147
18	2,014,194	1,744,850	209,343

揖西・岡崎「日本資本主義発達年表」より

22	同	第二号
23	千葉県教育百年史 第二卷	二六頁
24	「自由教育」 第三号	
25	中内敏夫 前掲書	二二七頁
26	平野婦美子「女教師の記録」	
27	那須正巳氏談	
28	中野光 前掲書	二〇七頁
29	中野光・高野源治著 「児童の村小学校」	六四頁
30	「自由教育研究」 第四号	

13	手塚 前掲書	一九五頁
14	同 書	一九八頁
15	池田・本山編 前掲書「谷本富論」	
16	「自由教育」大正一三年九月号(第一号)	八五頁
17	千葉敬愛高等学校教諭 那須正巳氏談	
18	手塚 前掲書	九頁
19	那須正巳氏談	
20	高井有一「真実の教育」	一二頁
21	「自由教育」第一号	